

2011年6月11、12日、当協会は「楽習フェスタ 2011 第13回聖徳大学生涯学習フォーラム」を共催しました。

1日目は、生涯学習を取り巻く課題とその対策を学習する基調講演と2つの分科会を実施し、2日目は、今回のメインテーマ「ネットワーク～いま、わたしたちにできること～」に即した研究発表、ワークショップなどを行いました。

6月11日 基調講演・分科会

1. あいさつ

「東日本大震災から学ぶ“克災のまちづくり”を考える」

福留強（聖徳大学生涯学習研究所長）

当研究所の福留強所長が今回の震災を経験して、これからの生活に必要な「生きていくための生涯学習」を「5K」と括ったキーワードで解説しました。

2. 基調講演

「今だからこそ考えるスローライフな生き方」

榛村純一（元静岡県掛川市長）

榛村純一さんは、1977年から2005年まで、7期に渡って掛川市長を務められ、その間、独自のスタンスでリーダーシップを発揮し、全国で初めて生涯学習都市宣言も行いました。今回は活動の中で構築された「スローライフな生き方」、その考え方を披露いただきました。



3. 第1分科会

「克災都市コミュニティ～市民と行政の協働システムづくりを目指して～」

榛村純一（元静岡県掛川市長）

田中靖子（青森県三戸郡階上町総務課主幹）

鈴木迪雄（NPO 法人全国生涯学習まちづくり協会理事）

司会：清水英男（聖徳大学教授）

震災発生以後、隣近所・地域の住民同士の協力が、様々な場面で直面した危機を乗り越えた現場の報告をもとに、活発な意見が交わされました。

4. 第2分科会

「克災ボランティア活動～ボランティア同士の絆新生を目指して～」

甘竹勝郎（前岩手県大船渡市長）

山下真由美（茨城県守屋氏放課後子どもプランマネージャー
茨城県放課後の居場所づくり推進アドバイザー）

小松和重（千葉県成田市立前林小学校教諭）

司会：齊藤ゆか（聖徳大学准教授）

突然の大きな揺れ、その時、子どもたちと共にいた大人が、どのような判断を行い、どう行動したのか。その状況を検証し、今後の備えについて議論しました。



6月12日

2日目は、震災を経て、改めて実感した日本人の絆の力や、思いやり・支えあいの心、そのすばらしさ、大切さを再確認し、本事業のメインテーマ「ネットワーク～いま、わたしたちにできること～」に即したブースを、聖徳大学生涯学習社会貢献センター（10号館）の2、7、8、9、12、14階に設置しました。

○14階、メイン会場は「日本を元気にネットワーク」をテーマに、東日本大震災に関連したブースを集約しました。

注目を集めたのは、「食べて応援！東北ふるさと自慢チャリティー博覧会」です。岩手、宮城、福島、それぞれの被災地の名物和菓子、地酒、特産アスパラをチャリティー販売しました。中でもJA会津みなみのみなさんに届けていただいたアスパラは、グリーン、ホワイト、パープルの3種類。どれも鮮度抜群で、野趣あふれる香りが来場者の購買意欲を掻き立てて、好評のうちに完売しました。

○12階は「子どもネットワーク」。子どもたちの元気と笑顔があふれる空間でした。

盛りだくさんの企画の中で、特に人気が高かったのは、かえっこバザールです。子どもたちがいらなくなったおもちゃを持って集合し、とりかえっこや、お手伝いをして、ポイントを貯めて、欲しいおもちゃを手に入れるというアートプロジェクトは、子どもたちの歓声が絶えないブースでした。



○9階で行った「学生ネットワーク」は、学生が同じ時代を生きる仲間と、社会問題から身の回りの話題まで語り合うワークショップを行いました。

○8階は「松戸ネットワーク」がテーマ。地元・松戸で、それぞれのテーマでまちづくりに貢献なさっている団体の活動はどれも特長的で、来場者の関心を集めていました。

○7階「学習体験ネットワーク」は、地域のみなさんにご好評をいただいている聖徳大学オープン・アカデミー（SOA）の模擬授業体験を行いました。今回行った4つの講座はいずれも、実際に自分の手でモノをつくる内容で、大人の方はもちろん、お子さんまでご参加いただきました。



○2階はピアノの伴奏と歌声のハーモニーで、心地よい時間が流れる場所「コミュニティ・カフェ 楽しく歌いましょう」の会場に利用しました。懐かしの歌声喫茶さながらに、参加者が一緒に歌って、語らってのひとときわ楽しい交流スペースでした。

今回の楽習フェスタは、「ネットワーク」がキーワードでした。人と人、人と地域、人と環境、私たちが震災で感じた絆の大切さを改めて深く心の刻んでおこう。人は一人では生きてゆけない。そんな当たり前のことを、しっかりと認識しておこう。

だからこそ、手と手を携えて困難に立ち向かっていこうという、私たち聖徳大学生涯学習研究所のメッセージを込めました。

いま、コミュニティのあり方が問われています。未曾有の大震災で残された私たちは、希望に満ちた社会を構築していかなければなりません。今日より明日が輝くように、私たちはいつも「いま、わたしたちにできること」を考え、行動に移していくことを課せられています。

